

2015年6月

第2回 留学生レポート

2014年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生
Stanford University Department of Economics Ph.D. student
野田 俊也 (Shunya Noda)



冬学期のテストが終わった後、「少し休憩するか」と決意しましたが、頭が休まる趣味を全く持っていない人間なので、すぐに時間を持て余しました。

まだ宣伝する研究成果物が潤沢にあるとは言いがたいですが、せっかくなので暇つぶしがてら [Web サイト](#)を試作。

左の写真は、そのプロフィール用に(セルフタイマーを使って)撮影したものです。理論研究(「プロフィール写真の撮り方」で検索)と実験(撮り直し)を経て、もっともらしいポートレートが撮ったつもりなのですが、写真部の後輩によれば「照明がなくてない」そうです。

2014年秋より、スタンフォード大学の Ph.D.プログラムに留学している野田俊也です。6月9日にちょうど1年目のカリキュラムを終え、しばらくの自由時間を獲得しました。

1. 神風が吹く

前回の留学生レポートでもご説明した通り、アメリカの経済学の Ph.D.プログラムでは、Comp, Prelim, Qual¹ などと呼ばれる進級試験があることが一般的です。スタンフォードもご多分に漏れず、入学時には Comp を1年目の終わり(6月)に受けなければならないと説明されていました。ところが突然、4月1日に「今年から Comp 受けなくて良くなるから!」というアナウンスがなされました。1年生一同、最初は「信じられない」

¹ それぞれ Comprehensive Exam, Preliminary Exam, Qualifying Exam の略称

「エイプリルフールだろ？」と騒いでいたのですが、事実だとわかるとみんな大喜びしました。

「アメリカにまで勉強しにきて、何故試験がなくなったことによって喜ぶんだ？」と思う方もいらっしゃると思うのですが、この経済学部の **Comp** というものは、論文を書く、発表をするというような、研究者としてのスキルを見るものではなく、1年目のコースワークで学んだことを隅々まで理解できているかを問うだけの筆記試験なのです。特に私の場合は、専門的に追究しようと志している分野であるミクロ経済学ではコースワークを免除されていることもあり、**Comp** のために勉強しないといけないとされていた科目は、マクロ経済学と計量経済学という、少なくとも当面の間は手をつける予定がない分野でした。率直に言ってこの準備に時間を取られるのは煩わしい、その時間があれば、より専門的な2年生以上向けのクラスを履修したり、自分の研究にもっと手をつけたりしたい…とっていました。

代わりに設定された新しい進級試験は、2年目の間に実施され、その内容は **field** によって異なるのですが、私が専攻する予定のものだと、「2年目の終わりに、論文の種となるような、オリジナルの定理・モデル・数値例を教授陣の誰かに発表すること」です。私は既に完成された論文も、これから試してみようと思っているアイデアも複数持っているので、この新しい要請は研究に集中していれば自然にクリアできそうです。

まさに私がそういう受け止め方をしているように、この制度変更は、早い時間から学生に研究を意識させ、取り組ませるようにという意図で導入されました。周囲の学生を見ると、狙い通り、学生たちは自分の興味関心に近いセミナーに出たり、研究のアイデアを練ったりという作業に、より時間を割いています。とはいえ、全員が全員新しい制度に賛成しているわけではなく、「最初に経済学全体の基礎を幅広く叩き込んだ方が、最終的には高い研究能力が身につく」と主張する反対派もいるそうです。この制度が、将来のスタンフォード産 **Ph.D.** の品質にどういう影響をもたらすのかは、少なくとも第一世代(我々)が卒業する年以降にならないと判定できませんが、私個人は成功裏に終わるのではないかと予想しています。

2. 研究の進展

前回のレポートでも触れた、修士論文の改訂についてですが、似たような研究をしている研究者もいるので、なるべく早く再投稿してしまわないと…という焦る一方、授業を落とせば **Ph.D.** 学生としての立場が危ういという面もあり、歯がゆい思いをしていました。このため、純粹に研究に割くことのできるという時間で見れば、東大にいた頃よりも制約は多かったと思います。(もちろん、1年目の『一般教養』を終えてしまえば、また自由に研究できる時間がやってくるのですが)

春以降は **Comp** の廃止がアナウンスされ、論文の改訂に十分に力を注ぐことができるようになりました。この論文を売り込むにはどういうイントロダクションを書けばいい

か、ということ話を種にして、Gabriel Carroll, Matt Jackson, Ilya Segal, Juuso Toikkaら、一流の理論経済学者たちと面談してもらうこともできました。そしてそれ以上に、小島武仁先生、菅谷拓生先生には、論文の売り方についてのポイント、学界の事情、4～5年後にジョブマーケットを出ることを見据えて、どういうポリシーで投稿先のジャーナルを選択していくのが良いかなど、親身な指導をしていただきました。おかげで、修士論文の内容面での改訂は済んでおり、現在、クラスメートにネイティブ・チェックを頼んでいるところです。(Alex Bloedel というクラスメートに引き受けてもらったのですが、彼はきっと、数年後にはビッグな理論経済学者になっていると思うので、ぜひ記憶の片隅に残しておいてください。)

また、スタンフォードでの講義とセミナーから、新しく論文になりそうなアイデアもいくつか得ることができました。ここに詳しい内容を書くのは時期尚早ですが、上手く解ければ良い反応がもらえる感触はあり、どうモデル化するかについても具体的な考えがまとまっているので、論文になる確率はそれぞれ5割以上ありそうな気がしています。次のレポート期限までにファースト・ドラフトを書けるよう、がんばってみます。

3. 上昇トレンドのスタンフォード

経済学では、かなりはっきりと大学ランキングについてコモン・センスがあり、スタンフォードもトップ 4 とか 5 とか呼ばれる最上位の大学群には属しているのですが、MIT とハーバードは更に上位に据える評価が一般的です。

しかしながら、最近の教授陣の発言や、学部の補強の様子などを見ていると、どうもスタンフォードの経済学部はけっこう本気でMIT やハーバードを抜きにかかっているように見えます。来年度から、2014年にジョン・ベイツ・クラーク賞²を受賞した、Matthew Gentzkow がシカゴ大学から移籍してくることが確定しましたし、春には2013年の受賞者である Raj Chetty を勧誘するために、学部がパーティを開きました。この直前には、スタンフォード大学理事長の John Hennessy が直々に説得にかかったそうです。他にも、大型移籍の噂は色々あり、所属する学生としては、これらの交渉が良い結果に終わることを祈るばかりです。

就職市場の実績も、2014-2015は「過去最高」と言われるほど目覚しく、スタンフォード大学、ハーバード大学、シカゴ大学、ノースウェスタン大学など、名だたる一流校に大勢の学生がオファーをもらったようです([ここ](#)に一覧があります)。今後もこの状態が維持される可能性は低いかもしれませんが、今年の実績だけを見れば、MIT・ハーバード以上の結果と言えそうです。自分もこの上昇トレンドに加わって、就職市場のスターとなるよう、がんばります。

² 40歳以下のアメリカで活動している経済学者に与えられる賞で、受賞者の多くが後にノーベル経済学賞を受賞していることから、「最もノーベル賞に近い賞」とも呼ばれています。Wikipediaの記事が[こちら](#)。(世界的な経済学者の多くはアメリカで(も)活動しているので、「アメリカで」という部分はそれほど制約的ではありません)

4. 同期の奨学生たちとの交流

FOS で知り合った人たちは、世界中に散らばりつつ、年中研究に勤しんでいるので、なかなか学期中に会うことはないだろうな、などと思っていたのですが、この半年はなぜか立て続けに会う機会がありました。(最初に金石君と会ったときは、「写真を撮ってこのときの話を書けば、留学生レポートのネタが 1 つ埋まる！」と思っていたのですが、結局、川上君・田中君とも会ったので、どうコンパクトにまとめるかが逆に悩ましかったです。)



2 月に日本から来た友人との観光旅行がてら、バークレーの金石君を訪れ、機械工学部の中を見学してもらいました。

門外漢の私には、彼が説明してくれた研究の、専門的な意味でのすごさはきっと伝わっていないと思うのですが、子供の頃はロボコンやレゴのマインドストームが大好きだった人間として、とてもロマンを感じました。



6 月、川上君が用事でスタンフォードへやってきたので、一緒に“[sushiritto](#)”を食べに行きました。

最近読んだ、[人工知能についての一般向けの本](#)は、川上君の東大時代の先生が書いたものらしく、色々教えてもらいました。

短い滞在期間でも、色々な人にアポを取っている川上君の積極性は、私も見習わなければならないと思います…。



ちょうど試験を終え、この留学生レポートを書いている最中に、ハーバード大学へ留学中の田中君が、ベイエリアに立ち寄ってくれました。

始終、ベイエリアの気候の良さを羨ましがっていましたが、彼がスタンフォードを観光している間は珍しく曇りのち雨。スタンフォードの天気は、1年間傘がなくとも生活できるほど快晴続きなので、かなりの不運です。

研究者生活を続けていれば、またスタンフォードに立ち寄ることはあるはずなので、快晴のスタンフォードはそのときに楽しんでもらえるでしょう。

5. 今後の予定など

夏休みの間は、まず今 80%ぐらい仕上がっている論文である “Incentives of Pre-Mechanism Investments with Externalities (仮題)” (修士論文の指導教官である、松島斉教授との共著論文) の仕上げと発表に注力しようと思っています。現在、7月に一橋大学・東京大学で、8月に大阪大学で、9月に京都大学で発表する予定となっており、その後、アメリカに戻って、スタンフォードでも発表をしようと思っています。得られた洞察は面白いと思うのですが、数学的に込み入った分析をしているわけではないので、まさに「どう結果を解釈し、売り込むか」という部分が、良いジャーナルを狙えるかどうかのポイントになりそうな気がしています。

また、新しいアイデア、途中で放置してしまっている論文も少しあるので、それらについてゆっくり時間をかけて考え直し、ちゃんとした論文にしたいともっています。理想は、夏休みの間にいくつかの結果を揃え、それを秋に教授陣に見せて反応を伺っていく、という形なのですが、そう上手くいくかどうか、やってみないとわかりません。

秋からは2年生として、より専門的な内容の授業を取りながら、論文を書いていく、という生活スタイルになります。2年目の終わりには、2nd year paper という、日本でいう修士論文のような課題もありますし、徐々に教授陣から、きっちりと研究成果を出していくフェーズに移行します。私は field として、Microeconomic Theory と Market Design を選択する予定³で、その他にも、他学部で開講されている Operations Research や Computer Science の授業も取っていきたいと思っています。(スタンフォードがこれらの分野にも強いことも、とてもありがたいです)

6. 終わりに

夏休みの間は、主に日本で研究・発表をする予定としてしまったため、残念ながら夏の交流会は欠席させていただきますが、ともかく私は元気でやっています。南出君が幹事をし、船井情報科学振興財団が後援している、2015年7月25日の[海外大学院留学説明会@東京大学](#)には私も参加いたします。奨学生のパネリストの皆様、そして海外留学に関心を持ってこのレポートを読んでもらっている皆様、当日お会いできることを楽しみにしております。

最後になりましたが、改めて、私の学生生活を支援してくださっている公益財団法人船井情報科学振興財団の皆様、厚くお礼申し上げます。次の留学生レポートでも良い報告ができるよう、一生懸命研究に励みたいと思います。

³ この2つは密接に関連した分野であり、去年までは同じ“field”に分類されていた関係で、学部からの選択必修の要求を満たすため、必ず他の field の授業を取る必要がありました。今年の制度変更に伴ってその必要がなくなり、まさに神風が2度吹いたような状況です。